

堀江座に於ける菅原伝授手習鑑素人評〈摘録〉

中村商海子

〈出典：「浪花名物浄瑠璃雑誌」明治39年1月号〉

去る一月二日より興行したる堀江座は開場以来毎日々々爪も立ぬ程の大入にて世間でも大評判である、題物が宜いので、ツイ此程新靱の道明寺と雛の配所と春子の寺子屋を目当に、盲の垣覗きと出掛けたが、成る程世評に違わず、実に立錐の地なく割れ返る程の大入であった、是も狂言に因みある南無自由自在天満宮の御利益とやいうべく、所で評者も例の由良之助後れ馳せて棧敷へ割込み道明寺の半ばより見物したる盲評を左に紹介致すべく、併し根が素人のめくら評であるから叱責給うな

(丙午一月十日稿)

『相丞名残』の段は、『菅原伝授手習鑑』道明寺の中にて最も重きを置かれ世人の眼蝟集して最も八釜しき題、同座春狂言として旧臘発表せらるるや、先ず眼目とするこの場担当の太夫は誰なるや、曰く甲……曰く乙……否曰く丙丁……なりと、敏くも聴衆天狗界の評区々なりしが素人眼には意外の「新靱太夫」と落札せられ、先ずは場面と太夫の音声、この二つの性質上から考えると「新靱太夫」はドオモ悪声であるから、この悲観的静粛潔白優美なる場は全然不相当と断定せられていたのであるが、猶また实地目撃して考うると世人の想像とは正反対であるというて宜いのである、此処は当局者の事であるから何うにでも演って退けるから敢て言うのは管である。

予は遅刻のため前を聞き漏し菅相丞二度の出から謹聴したのであるが、『ヤアヤアヤ判官待たれよ』と宣う相丞の辞、敢て美音とは云われぬが、充分沈着の態度を以て優美しとやかにこなして大に貫目があった。崇敬有徳の相丞はこの斬新美観意匠を凝した潔白の舞台奥床しき別殿に生けるが如き御神の左も現出まします如くに感動を与え更に満場水を打ちたらん如く悲観的大に感賞の光景であったが、この地合いは津太夫に譲らず余程貫目があったと天狗連の評であった、判官輝国も覺寿も有情的無量の味いがあるが皆夫れ夫れに語り分けられた、夫れから『例は本朝名高き絵師巨勢の金岡が書たる馬は、夜な夜な出て萩の戸の萩を喰ひ、唐土にも名画の誉れ、貞道子が墨絵の雲龍雨を降せし例もあり』云々の所、字句あざやかに意味最も明かで隅から隅まで能く通じたり、而して待ち焦れいたる

『讒者の為に罪せられ、身は荒磯の島守と朽果る後の世まで筐と思し召れよと、仰せは外に荒木の天神、河内の土師村道明寺に残る威徳ぞ有がたき』

云々の辺りは余程引立つ所であるが、惜い哉音声が全然カスレて薩張成功せなかつたは実に珠に瑕であった。併し本人は充分骨折をしているが音声の性質であるから仕方が無いと評せられた、が此の太夫の音声を単に悪声悪声悪声と云うも理なれど、其の悪声を推して語りなば或は俗受けに可かも知らぬが、これに反して丈は天性なる音声を軽く遣かっているのであるから左程耳障りにならぬを、彼是云うて俗受のせざる所是非もなき次第である、

要するに津太夫住太夫等の例を引く輩もありしが、此の太夫としては先ず無難と云うて祝するの外なしである、又見物の眼には大そう骨が折れているように見ゆれども音声を軽く巧みに使うて居る故、却って楽天的に語りこなし加もこの大建物長丁場を世人の想像せし意外に感起せしめ、満場静肅大喝采ありしは同座第一流の人物、流石老功と賞賛するの外なしである、段切に至る『お年故のそら耳か、今鳴たは髓に鶏…略…子鳥が鳴ば親鳥も……心の嘆きを隠し歌、鳴ばこそ別れを急げ鶏の音の、聞へぬ里のあかつきもがな、と詠じ捨』云々より『雲井のむかし思ぼるる左遷の身の御嘆き、夜は明ぬれど心の闇路、照すは法の御誓ひ、道明らげき寺の名も、道明寺とて今も猶榮へまします御神の生るが如き御姿』…略…『涙の玉の木樓樹』云々以下の段切まで字句明かに『道明寺』というを歴史的に解決されたる如く語りしは大に結構大喝采であった。

この太夫に対する團丸の糸は水に油と云う方であるがその音色に於ても何の趣味もなく、素養に乏しき所是非もなし、併し本人は指一本なき不具の身をもって平然この長丁場を弾退きし所感服の外なし、

さて、手摺の方は素人の我々が別に取立てていう、炎所を知らざれども、吉田玉松の「菅相丞」は道明寺にて二度の出『ヤアヤア判官、先づ待たれよ』と御簾の上りし所と、後の『輿に召したは木像ならぬ優美の姿』云々の所は、始終沈着にして寛仁態度の様を現わし、例の画の物語りの間も能く遣い、伏籠の出で後ち『今鳴たは髓かに鶏』の辺りより覺寿との別れ、菫屋姫に対する父子の情も充分に見えて『嘆きの声に只だ一目見返り給ふ御顔ばせ』云々の処は悲痛胸に迫るさまは能く人物を活動せしめ、段切まで懸命に力を籠めて眼を他へやらず、舞台に重きを置きしは大に感服であった、

吉田兵吉の覺寿も之と対して申し分なく『立田の前』の死骸を見ての後ち、太郎を娘の敵と知って脇腹に刀を突く其の意気込も達者にて、『孫は得見えで憂目を見る』云々の愁嘆の思い入れもよし、『菅相丞』の物語りの間も透なくしてダレず、末段『涙の玉の木樓樹』まで人形能く活して弛みもなかりしは結構なり。

文造の輝国も勉強の程見え東吉の兵衛、玉市の太郎、東助の菫屋姫等は別に評する所には充分眼が届かなかつたが何れも熱心の程見えて目出度たし目出度たし目出度たし、此の場の舞台に於ける道具建の斬新に視線を引き、人形の衣裳の着附けに斬新を加えて行屈きしには満場の観客一驚を喫し何れもこの場は大好評であった

堀江座四月興行〈摘録〉

〈出典：「浪花名物浄瑠璃雑誌」明治43年4月号〉

前が菅原伝授手習鑑、中は恋飛脚大和往来、切に国言詢音頭を据え、車場の掛合に、大隅が加わり、三味線を団平が弾くと云う大勉強に釣込まれ、病中の評者も大勉強で出掛けたが、道明寺が開幕になってあったから汐待の段迄聞洩らした以下例の愚評を御覧に入るべし

大 序

▲大内の段

竹本 大海大夫
豊竹 司喜大夫
竹本 小苗大夫
竹本 美島大夫
竹本 稲太夫
竹本一三五大夫
竹本 二九大夫
竹本 旗大夫
竹本 小の大夫
竹本音^(ママ) 各 大夫
豊竹 小司大夫
竹本 雛栄大夫
竹本 小幾大夫
竹本 的 大夫
竹本 松月大夫
竹本 明石大夫
竹本 春次大夫
竹本 菅尾大夫
竹本 東大夫
竹本 雛子大夫
豊澤 新作

▲加茂堤の段

竹本 小藤大夫
竹本 春代大夫
竹本 松見大夫
竹本 三大夫
竹本 初音大夫
竹本 隅栄大夫
竹本 生栄大夫

竹本 栄大夫

竹本 隅の大夫

竹本 絹大夫

豊澤 龍市

野澤 吉郎

野澤 吉久

豊澤 團市

豊澤 新作

豊澤 猿吉

▲筆法伝授の段 竹本 敷島大夫

豊澤 龍市

竹本 里大夫

豊澤 團丈

豊竹 司大夫

豊澤 團友

竹本 菅大夫

豊澤 助三郎

▲築地の段 竹本 組栄大夫

豊澤 富治

▲汐待の段 竹本 米大夫

豊澤 仙市

是迄は聞洩しの部なれば評せず

▲杖折檻の段 竹本 三笠大夫

野澤 春治郎

三笠も近来はくく含み声ききよが取れ出し聞好しどろくなった、此杖の折檻は随分やかま八釜しどろしい語り場であるが、か可なりの出来にて、上の部であった、益々勉強せよ。

▲東天紅の段 竹本 角大夫

豊澤 富太郎

角は声癖のある人なれば、東天紅はいかがと思いに、意外にも評判よ能く、聞て見ると成る程宜よろしかった。併しかし挟はさ箱はさみを、はさん箱いと謂うので耳立しくねて悪かった「親人も此宿禰も肝にこたへてびつく悔いりした」是は宜よろしかった「舅おや拜つかみ夫たしかを拜あみあ」此所は引字あになった「子供のする業わさおとなげないアハハハハ、コリヤ、と兵衛あに制あされムフフフ」との笑あいも好あかった、総体あに力あが入り上評あ、此所の道具あは庭園あの書割幕あにて、人形あの方は文五郎あの宿禰あに気あを入れ遣あうて居あるはあ髓あにあ頭あわれた。

▲道明寺の段 竹本 長子大夫

此所人形出遣イ 野澤 八助

「早期限ぞと御膳の拵へ」より「相丞諸共一間の障子引立内に隠れ居る」迄水奴を語る、流石長子じゃ、品位能く願る付きの上出来、「遣に河内郡領の」は殊に好く「ヤアヤア判官先づ待たれよ、菅相丞は是に有り」品位充分、併し長子たる者が「刈屋しめ」とは如何。人形は道明寺の終りに総括して評すべし。

▲相丞名残の段 竹本 大島大夫

此所人形出遣イ 豊澤 竹三郎

「輿に先立つ警固が大声」より、大島も良弁杉此方語り口に品位備り、其以前とは打って変り、毎興行好評を博し居れるが、今回は如何と思ひしに、案じるより産むが安して、品位もあり出来よし、併し「とぼけさしやんなマ姫殿」此マの字を入るる為間が空くから入れぬ方宜しと思う「巨勢の金岡が書たる馬は、夜な夜な出て、萩の戸の萩を喰」以下品位も俱によし、「身は荒磯の島守と」無事「子鳥が鳴ば親鳥も」品もあり憂いも利き、破れ道明寺にならざりしは手柄と申すべし、糸の竹三郎も余り荷が勝つのでどう有うかと思ひしに、是亦案外丸く弾き「照すは法の御誓ひ」より「爰に残れる物語」迄不難、大三重も一ヶ所纏れたる外無事、此纏れる所は、一寸口でも真似が出来兼る、弾く者にする、誠に気の張る処で、一寸堅くなったら何人も纏れる所である、併し竹三郎としては道明寺は成功である、それかあらぬか造り花や舞台布団の送り物があつたを見受る、玉造の菅相丞能く遣うた、相丞は動かしたら動かす丈け悪くなると云う難物、二代目が遣うた時、紋十郎が覚寿であつた、是れが動かなんだので相丞が動き過るから見劣りがした事があつた、動かして悪ければ、只々持て居たら宜しからんと思われどそれでは魂が這入ぬ、畢竟皮肉は此間にあるのじゃ、それから人形には少し無理な注文なれど、階段は正面に付るが本型であるが人形の方では都合が悪いから文楽でも二重の下にて付る為に、相丞が庭に下りて正面迄戻る間に肝腎の気が抜けて仕舞う、何んとか工夫のなきものにや、

「夜は明ぬれど心の闇路、尽ぬ思ひにせきかぬる、涙の玉の木榎樹」、杯の文句あれば、相丞は充分憂いに沈み、階段一段一段下るに心は跡へ引らるる思い肉の処である、道明寺であるが、作者は此処は天満宝珠院の玄関の所を書いたもので、今に相丞見返りの松の古跡残りあり、同寺の階段を下り給う時、飛石に御姿が写りしを、当時の寺男が、大將軍の地内へ祭りしが、今の天満宮、此寺男が見山やの祖先である。何が為に菅公が宝珠院へ来られたか云うと、院主とは学友の間柄であつた、それで汐待の間に訪問された処折悪く、院主不在であつたから、書置を残し、名残惜しく帰られし時の事である、話し枝道へ外れた、却説兵吉の覚寿も悪くはないが「爰でも悔りかしこでも悔りびくり心に迷ひ」と、木像とこなたと見競べる為歩行する間、踊り居る型は如何と思つたなれど、

「髪私」ひから品位を持直した、清吉の輝国じゃ、「一時違へば三里の後れ、ぼつ付て取返さん、とせきにせいてかけ出す」との文句のあるのに、大夫を待たせ、悠々と肩を抜き、袂より取縄を出し、手繰り直して駈出す杯、本文に抵触する、水奴の間に燭台出しあり、太郎殺されてから邪魔になる、是を取り入るに、腰元を出して取らず、誠に些細な注意なれど得心であつた、文五郎の太郎、別に可否を見留ず。

近松座の四月興行〈摘録〉

〈出典：「浪花名物浄瑠璃雑誌」大正2年4月号〉

今回は摂津大^(ママ)椽名残芝居と云う文楽座の大敵を控え之に対抗して一日より蓋を開けたる事既報の如し、前菅原伝授手習鑑大序より四段目迄、中が桂川連理柵六角堂より帯屋迄、切京鹿子娘道成寺と云う取合せ、菅原は、延享三年八月二十一日竹本座の興行に上せしものにて、浄曲傑作中の傑作なり、作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲なるが三好松洛の腹稿によりて、道明寺の段は松洛自身、佐太村は千柳、寺子屋は出雲と場割を定めて、親子の別れを三つに分て作り、古今の大入を取りし縁起物なり、桂川は安永五年十月十五日北堀江座の興行に上せしものにて、作者は菅専助、道成寺は長唄物にて、此事は後に記すべし。扱^{きて}今回の役割は人々に当嵌め能く割て有り、道具も手軽く出来、従て小言の少ない方なるが、何^{なに}分^{ぶん}一方は古今の徳人摂津大^(ママ)椽の御名残興行と来て居るので自然押され気味なるは是非なし、例に依って例の如く地方読者の為に報告^{かたがた}劣々愚評を^{なら}並べ御覧に入るべし。

大序

| | |
|---------|---------|
| 大内のだん | 竹本 春治大夫 |
| | 竹本 明石大夫 |
| | 竹本 敷島大夫 |
| 加茂堤のだん | 竹本 社大夫 |
| | 竹本 絹大夫 |
| 筆法伝授のだん | 竹本 薫大夫 |
| | 竹本 角大夫 |
| | 豊澤 新造 |

此伝授場の中途より入場したので、其以前は評なし、(角)「手本の上をしき写し」此^しはすである「鑽^{いさご}レ沙^{をきる}草^き只^{はただ}三分計、跨^{きにまたがる}レ樹^{かす}霞^{みわす}纒^{かにはん}半段余、是は我作れる^{からうた}詩」は口捌悪しき為文句不明瞭「主^{しう}でなし、家来でなし」を腹に憂いを含む工合能く、総体菅丞相は品位備わり宜しかりしが「御流儀^いを」引「せめてしと夜といはれもせぬ」誤る「見る目いぢらし夫婦が姿ア」付く、併し総体の出来は悪き方にあらず「泣^{なく}々御門を出て行く」で、菅家御門の堀外の道具と変る。

| | |
|-------|---------|
| 築地のだん | 竹本 組栄大夫 |
| | 豊澤 龍市 |

「出て行」の三重よりで、此場は源蔵と引違いに梅王駈戻り、菅丞相の罪人と成たるを知らせに帰り、警固の役人丞相の前後をかこみ流罪の場所極^{きま}る迄閉門^{あつ}と有て青竹で門を打、源蔵夫婦が梅王と計って菅秀才を盗出し落行くと云う段取を相当に語り居たるが、菅丞相の品位は口に合わず「御台は警固のしと目も恥ず」「しとの手本と成りにけり」^{など}杯^ひの字の云えぬは困った者。

杖折檻のだん 竹本 三笠大夫
豊澤 團 勇

「丞^(マ)菅相の御別れ」より「今宵限りの御奔走とりとり騒ぐ計りなり」迄「打るる姉妹打つ母も」受る、菅丞相も映りよく、案外の上出来で有った、此処奥庭の書割道具と変る。

東天紅のだん 竹本 錦大夫
豊澤 仙 市

此所は人形出遣いで「土師^{はし}の兵衛^{へうゑ}は一問より」から東天紅を語る、是は大夫に打て附た場なれば是が悪かったら錦の価値に關す「丞相を迎ひのほり興スハといふ時……間に合せと」間^まが宜^よかった「しと声聞ねば」は誤る「肝にこたへて悔^ひりした」宜く「子供のする業おとなげない、あれが何の役に立つワアーハハハ」と高く笑い、兵衛に押えられて「フーワアハハハ」と^{しめ}めて笑うは面白し、先は上評。書割を引上ると、白木造りの御殿となり品位上々。

道明寺丞相御名残のだん 竹本 大隅大夫
豊澤 團 平

「早刻限ぞと御膳の拵へ」よりこんな皮肉物に成ては外に真似^{まね}人は無い、先当分は是以上の道明寺は聞く事は出来ぬから、斯^し道家^{どうか}は後学の為め聞て置くべしじゃ「お年故のそら耳か、今鳴いたは^{たしか}髓^{ずい}に鶏、あの声は子鳥の音、子鳥が鳴ば親鳥も、鳴は生^{せい}ある習ひぞと」腹^{はら}で泣て語る、聴衆感じて泣く、此長丁場の物を短かく感じたは語る人の力なり、又團平の三味^{しみ}も大夫を助け能く弾きたり、殊に「道明寺^{とて}迎今も猶、栄へまします御神の、生るが如き御姿、爰に残れる物語り」で充分叩て置き、気を代えてチンチンチン「尽ぬ思ひにせきかぬる」オロしに掛る工合は腕じゃ、遅く来て此場を聞^{はず}外^なす人有り、評者は勿体ない感じがする、人形では菅丞相を玉造が遣うて居るから落付も有て何んと無く貫目も備わり「巨勢^{こせ}の金岡が書たる馬は、夜な夜な出て萩の戸の萩を喰ひ、唐土^{もろこし}にも名画の誉れ云々」不動の姿勢で品位有て善かったが、庭へ降てから首の振り様が未だ多いは腹が充分据らぬ結果なり「是ぞ此世の別れとは」で左の袖を巻て上げるは紋切型であるに只袖を上げし丈^よけで有たは、左を遣う者の手落で有た、玉市の太郎は好い役が付て可なり見られた、兵吉の覺寿マアマア、文五郎の立田は悪き筈なく、他は評する程の事は無く、幕。